



人口減少は悪いのか

株式会社 日本経済研究所

常務執行役員

地域本部 上席研究主幹 佐藤 淳

我が国は人口過剰を独特の知恵で解決してきた。日本的経営はその工夫の一つである。人口が減少すれば、その種の苦労は不要になり、これまで効率を犠牲にし、雇用を確保してきた地方圏に大きなプラスとなる可能性がある。

我が国は人口減少局面に入っているが、果たして人口減少は悪いことなのだろうか。歴史を振り返れば人口過剰との戦いであって、第二次大戦ですら、その帰結にも思える。また世界は、かつての日本と同じ悩みを抱えており、特にサハラ以南アフリカの人口・貧困問題は解決が急務である。

さて日本は人口減少社会である。労働力は減少し、有効求人倍率は上がり、一人当たり資本が増加している。これまでは逆であった。労働は過剰であり、雇用の確保に四苦八苦し、資本は不足してきた。終身雇用やすり合わせ型の生産システム等、日本的と称される特徴は、人口過剰への適応だったのではないか。人口が多ければ転職は容易ではない。人々が終身雇用を熱望し、その代償として高いロイヤリティを払ったことは、そのような環境では合理的である。また、きめ細かな調整による、すり合わせ型の生産システムは安価で高い品質を実現したが、労働が過剰で相対的に労賃が安かったから可能となったようにもみえる。欧州のすり合わせ型産業が高級ブランド化しているのとは好対照である。

すると、これからは日本的とされてきた特徴は徐々にフェードアウトするのではないか。すでに、雇用の多くは非正規化している。批判も多いが、史上かつてないほど有効求人倍率が高く、さらに上昇が見込まれる状況においては、移動が容易な非正規雇用のほうが合理的と言えなくもない。また、低付加価値品から高級品へのシフトが垣間見えてきている。すり合わせ型の産業は、低価格オペレーションから、ブランド価値の実現にシフトするだろう。

地方圏の性格も変わる。地方圏は人口過剰時代の安定装置だった。地方圏を揶揄する場合に、効率が悪かったり、労働生産性が低かったりすることを欠点として指摘する向きがある。実はこれは、日本の特徴でもある。地方圏こそが日本的であったのである。

非効率性は人口過剰の結果に過ぎない。効率化を優先するには、人口が多すぎて、失業等の調整コストが大きかったためである。欧米は、古くから先進国で、人口が比較的安定していたために、後顧の憂いなく、効率化できた。我が国はこれからである。人口減少に伴い、急速に人手不足に転じつつある。これからは効率化に

舵を切らざるを得ない。

我が国が戦後焦土から復興するにあたり、最大の脅威は人口の増加であった。植民地からの引き上げのみならず、戦前の軍事力増強をめざした「産めよ増やせよ」の影響で出生率は高かった。人口増加は、今日のアフリカ等と同じように、発展を阻害する要因として考えられていたのである。人口中絶の是認や愛の小箱(囲み参照)等によって、急速に出生率は下がり、多産少死から少産少死へ転向を果たしたが、人口増加はその後半世紀以上続くことになる。

人口増加の局面において、最も重要なのは、仕事や役割を与えることである。これは非効率性を招く。一方で、敗戦により産業が壊滅していた我が国は、国際競争に勝ち経済を成長させる必要性にも迫られていた。要するに、効率性と非効率性を両立する必要があったのである。

我が国が採用したのは、一種のトップランナー方式であった。輸出に関連する一部の製造業を効率化する一方、その他の産業は、効率化よりも雇用の確保を優先してきたのである。この手法は、近年まで見事に機能し、経済の発展と一億総中流とまでいわれた平等を実現した。

このような役割分担は、地方圏への再分配システムと相まって、社会の安定に大きく寄与してきた。人口増加や大都市圏への人口移動、高度成長によって、世の中が大きく変化する際の安定装置として作用したのである。効率化は製造業の一部に任せ、他の産業や地方圏は、専ら再分配の利害調整や雇用の確保を担ってきたと言っても過言ではなからう。

しかし、そのような時代は終焉した。人口は減少しているのである。人口減少が著しい地方圏ほど、人手不足に転じ、効率化が要求されている。

これまでの経緯を反映し、地方の食品産業で

は機械化できるところまで人手をかけているケースが多い。コメ農業に至っては、狭小面積に高級コンバインを導入し、稼働日数は数日で、他の日は、田の管理に精を出し、機械化と労力化を両立してきた。

これからは、当然ながら効率化が求められる。コメ農業でも100ha程度の集積があれば、海外に対抗することは可能とみられる。人口減少時代には不可能なことではない。食品産業は、効率化とブランド化を検討しなければならない。人手不足に対応するためである。これからは労働力が希少価値となる。生産性の高い産業や方式が勝ち残る。

生産性を上げる方法は2つある。ひとつは生産効率を上げる方法である。例えば地場食品工業には機械化の余地が大きい。これまで未着手に近かったために、効率化のフロンティアは大きなものがある。

生産性上昇の、もう一つの方法は、付加価値(ブランド価値等)を上げる方法である。我が国が得意とする職人技を多用する、すり合わせ型の生産方法は、コストダウンよりもむしろブランド価値の創出に向いている。

これらによる生産性の向上は、これまで効率を犠牲にし、雇いを確保してきた地方圏に大きなプラスとなる。地方の人口減少はピンチではなく歴史的なチャンスである。

「愛の小箱」

戦後初期、薬局では買いづらいコンドームや衛生用品を家庭に回し普及を図ったもの。日本らしく企業組合等が実施主体となった。なお、1955年には受胎調整実施指導員によるコンドームの販売が法制化され、販売マージンが同指導員の収入とされた。